

慶應義塾図書館蔵 『源氏物語絵巻』 について

いしかわ とおる
石川 透
(文学部教授)

『源氏物語絵巻』は、名古屋の徳川美術館や東京の五島美術館等が有する国宝の絵巻が知られているが、知名度のわりにその数が少ない作品である。特に、5巻以上の絵巻となると、ほとんど存在していないのである。また、冊子の状態の美しい奈良絵本も少なく、その多くは海外へ流出している。これは、本文が長すぎるあまりに、本文を含めた絵入り本を作成しづらかったことが原因と思われる。

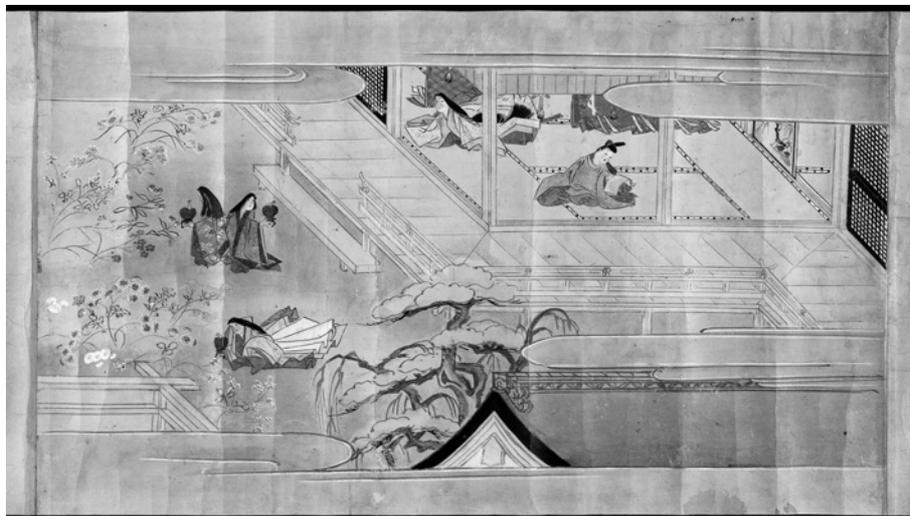
国宝の『源氏物語絵巻』が、ばらばらになって存在していることは有名であるが、元々作られた時からダイジェスト版であったことは、あまり知られていない。少なくともその本文は、『源氏物語』の全文を写しているわけではない。もし、本文全文を写したならば、何百巻になってしまい、とてもそれはできなかったであろう。最初から、ダイジェスト版として作られたのである。それ以降に作られた、『源氏物語絵巻』も、ほぼ全てがダイジェスト版であり、私の知るところでは、本文全文を備えた『源氏物語絵巻』は存在していない。

ただし、2008年に、「源氏物語千年紀」が催された時に、マスコミにも紹介された、いわゆる幻の『源氏物語絵巻』は、計画自体は、本文全文を備えた絵巻を目指したものと思われる。この幻の『源氏物語絵巻』は、その一部については、以前から研究者の

知るところであったし、その一部は、一巻だけで国の重要文化財にも指定されている。全体の何百分の一だけで重要文化財に指定されるのはおかしなことであるが、一巻だけでも国の指定を受けるほどに美しく豪華であると考えたい。

2008年は、その重要文化財の『源氏物語絵巻』と同時に作られた、いわゆるつれに当たる絵巻がいくつか紹介されたのである。その紹介されたものには、1600年代半ばの公家による奥書が存在している。それらの情報から見て、その本文は1600年代半ばに公家を中心に作成されたと思われる。もちろん、このように本文を公家が寄り合い書で書写した場合には、絵は当時著名な絵師が描いた可能性が高い。この作業を指示できるものは、かなりレベルの高い人物で、天皇家や将軍家といったことも十分に考えられる。ただし、現在残されている巻数や残り方からして、この計画は、『源氏物語』54帖中、10帖ほどの絵巻作成で終わってしまったらしい。江戸時代になっても、本文全文を備えた『源氏物語』の豪華絵巻は、完成しなかったのである。

その1600年代半ばは、慶應義塾図書館が多くの資料を所蔵している、奈良絵本・絵巻が作成されていた時代である。困ったことに、国文学でも美術史でも、『源氏物語』の研究者は相当数存在するが、平安



時代のことはわかっているが、この絵巻が作成された江戸時代前期のことがわかる者は、ほとんど存在しない。したがって、せっかくの貴重な絵巻が紹介されても、あきらかにおかしな意見や議論が多くなされていた。本来ならば、1600年代半ばの絵巻の制作状況を考えなければ、その存在の意義は明らかにできないのである。

この1600年代半ばは、奈良絵本・絵巻制作の黄金時代である。この時代には、素朴な作品群も多く作られているが、一方で、豪華絵巻や絵本も次々と作られている。近年紹介された水戸徳川家旧蔵の『源平盛衰記絵巻』や、以前から知られ、ばらばらに所蔵されている『太平記絵巻』、さらには、その挿絵が多くの教科書に採用されている越前松平家旧蔵の『平家物語絵巻』等々、いずれも10巻以上の豪華絵巻群である。旧蔵者を見ればわかるように、いずれも徳川家・松平家と関わる作品群なのである。その本文の筆者は、豪華絵巻専門の筆者であるものが多いが、『平家物語絵巻』のように、複数の公家による寄り合い書も存在している。幻の『源氏物語絵巻』と同じ時代に同じような状況で作られた作品があれば、その比較が重要になることは言うまでもないことである。

このような豪華絵巻が作られた時代には、10巻以上とはいかないが、同じような豪華絵巻も多く作成されている。最初にも記したように、絵巻物は、5巻以上ある作品はきわめて少ないのである。新しく慶應義塾図書館に所蔵された『源氏物語絵巻』は、5巻であり、元々六巻のうちの一巻を欠いてはいるが、貴重であることには変わりない。

『源氏物語』は、その本文を備えた作品はなかなか作成できなかったが、有名な作品であったために、その挿絵だけで享受されていたのである。形は、屏風や画帖になっていることが多く、やはり、江戸時代前期には相当数作られたものと思われる。この分野の研究者は、あまりもの数に手の施しようがない、というのが現状で、あまり研究が進んでいないが、今後の研究が期待できる分野なのである。

そのような中で、ごく一部の本文を記した画帖は多く存在しているが、それを絵巻化した作品は少ない。しかも元々六巻であったというのも立派な絵巻である。制作年代は、幻の『源氏物語絵巻』ともそう変わらない江戸時代前期と思われる。この時代の

奈良絵本・絵巻については、拙著『奈良絵本・絵巻の生成』(三弥井書店、2003年8月)、『奈良絵本・絵巻の展開』(三弥井書店、2009年5月)等に記しているので、御参照願いたい。

実は、慶應義塾図書館に入った『源氏物語絵巻』5巻ととてもよく似た絵巻が、山口県の毛利博物館に所蔵されているのである。こちらは、毛利家の旧蔵品である。ということは、慶應義塾図書館に入った『源氏物語絵巻』もおそらくは、江戸時代前期の有力な大名家によって注文され、制作されたものと考えられる。いずれにしても、まだまだ研究の余地のある『源氏物語絵巻』の、今後の研究の進展を期待して本稿を閉じたい。